

人」……といった趣のもの（column）専門みたいになつて、京都のいろんな人に会つては、毒にも薬にもならぬ浮薄な記事を書き、ちらしていた。その「あの人」の人」にとりあがるために阿刀氏をたずねたのだ。切抜きが残つていたので写しておく。

お婆りさんには聞いたらあすこの路地の奥の神社だという。路地ではないが、そういうえなくもないうなせまい小路のつきあたりに、これも神社よりはホコラに近いのが、それでも石の鳥居を建て阿刀神社と名のつてあつた。障子開けはなしていいさか不用心なところへ「ごめん下さい」と声かけたら、思いがけなくすぐそばで「はい」。となりの部屋から出てきたのが阿刀氏。語じられたところは二畳の茶室。床に敷輪菊の花押し、軸は古色ついて「蕉扇扇竹や……」の五言絶句。「船山」と署名があるので張船<sup>は</sup>ですかと聞いたう「よく御存知ですね、近ごろおめずらしい」とそれまで「ことば少なだつた」この人が実にうちにとけて話し出した。

阿刀はアトウとよみ、その家は弘法大師の生母の里方、大師の父田公の実弟で阿刀氏にくつこ入れした大足から始まり、弘文氏で四十三代目。その間一度もたえたことなく連綿としてここにその血脉を伝えているのは「飢寒三分、側室不可」という家憲のおかげ」と笑う。……東寺執行は弘仁十四年（ハニミ）から明治四年（一八七一）まで全真言宗の政所、いわば司政官だった。今では正月の「後七日の御修法」に奉仕する外は阿刀神社の宮司で、家学たる歴史の研究に打ち込んでいる。……談は山路爰山の「日本民史」にはじまつて蘇峰詩集につづり、古事記・日本紀に日月信仰はあるて星信仰はあらわれない考證、景教東漸次第から不動信仰の沿革へ、かど思ふとヨ

ネ・ノクチや草野バ平の詩がとび出すなど、三時間ばかりのあいだ博引傍証、変幻きわまりなし。記事はまだ少し残っているがあとは省略する。ところでその時だったか、後に会った時だったか、に糸白谷だつたか頬山陽だつたかの話が出たついでに、山陽を驚かせた少年詩人で中島子玉という人が豊後にいたのをご存知か、長吉体の詩を作るが、といふと、博聞強記のこの人もさすがに、あほえがない、ということだった。それから数年の中に、さきに訪うた南区の阿刀神社どちらがう中京の自宅で祭禮があつて招かれたとき、氏はすでに子玉の集の写本を入手して、わたしを煙にまいたのだつた。

わたししがその日忽然として阿刀氏を思い出したのは、そのことであり、そんないきやつを忘れてしまつてうろうろしていた自分の迂闊に浩嘆しながら、こうして電話口で氏を待つてゐるのだ。やがて出て来た氏に、いつか見せてもらつた子玉の集を借覧できなか、と頼じと、いまはしないこんでいるので、四五日のちに、とのことだつた。

四五日たつた。氏を訪問したが、会えなかつた。それからまた一週ほどたつた十一月二日午前、あらかじめ電話して訪い、子玉の集を借りつけた。そのとき氏にいつた。「子玉の書を手に入れました。かれの書はほかにはほとんどないそですな。苦労しました」

阿刀弘文氏から借りた中島子玉の詩集は题簽に「米華遺稿 空軒故賞」、扉に「米華遺稿 甲寅小春 空軒題」。子玉の死後の甲寅は嘉永五年か大正三年かだが、紙の色や題字の筆法などからみて、たぶん後者であろう。本紙は四十七葉。うち、広瀬建（淡窓）「中島子玉墓銘」一葉。古賀穀堂の評一紙。広瀬孝（林外）「中島子玉伝」二葉。「米華遺稿卷之上」十一葉。「米華遺稿卷之下」十二葉。「米華遺稿卷之下」十二葉。「拾遺」三葉。「拾遺」の第三葉づらに水篠小相「題米華遺稿後」「米華岳有感」「子玉墓」を付する。目次なく、紙に丁数を記さない。子玉の詩のあるものには淡窓の、時に穀堂の評語をそえ、のちに朱点を加えた人が、さらに、諸詩人の評を増加している。ただ、末点は巻の下の第六紙までで、第七紙以後にはない。抄写の文字は稚拙で、ときどき誤りと思われるものがまじる。

「中島子玉墓銘」は次の通りである。（）内は誤字・脱字と思われるものを仮に推した。淡窓の家集を見ることができたとき改訂したい。

嗟呼、是れ中島子玉の墓なり。子玉、諱は大典、後、如玉と改たむ。米華と号し、増太と称す。豊後の人。家は世々佐伯侯に事ひ、父は幹右衛門。子玉、少にして穎敏好学、嘗て我が門に在ること數年。既にして筑・肥・洛・揚の間に適き、昭陽・穀堂・山陽・敬所・小竹の詰老と遊び、既に許すに才子無双を以てす。又、大学に入り、贊を博士劉侗菴先生に委き、齊（齋）（齋カ）長に任せらる。景通林侯・冠山松平侯の知る所となり、数々礼接を加えらる。國

僕これを聞き、懼んでて傳官と為し、學政を掌どらしむ。青衿鄉風、勃勃として特に興る  
とするに、其の卒するに会う。年僅かに三十有四。配の宇野氏、一男を生みしも、亦、蚤く  
死す。子玉、人となり洒落にして繪飾を務めず。人おのずからこれを愛敬す。詩文は清新流  
利、筆先に趣走す。實に奇才なり。遺稿は愛琴堂藁七巻、日本新樂府一巻、雜著の未だ編む  
に及ばざるもの、亦、數千篇。没するに臨み口占して曰く、「高情あがめ自から世と遺文なまり、我  
は是れ南豊の一布衣。三十六鱗には猶お二爻欠くも、今朝あさ天上に化して竜飛せん」と。  
時に天保甲午三月十五日なり。遠近のひと歎惜せざる莫し。墓は佐伯城頭、碧松山久成寺に  
在り。碑面に題する所は眞の法諡のみ・銘に曰く。

何ぞ彼の妍なる今桃と李、中郎詩あり、艶にして綺。風は滄を捲いてへ今カ、繁瀾を迴す。  
中郎文あり、奇にして且つ詭。天其の才カ假して、齒かみを假かす、人人斯かの人を傷  
む、何ぞ忽尔たる。遺文桃らす、百千祀、我謂えらく、斯かの人を未だ嘗て死せすと。  
この文によれば、子玉は、光格天皇・家齊將軍の享和元年辛酉(一八〇一)に生れ、仁孝天皇  
・家齊將軍の天保五年甲午(一八三四)に死んだわけである。一八〇一年は、伊能忠敬が幕命  
により伊豆などの沿岸を測量し、細井平洲(74)・糸慈周(65)・小沢芦庵(79)・本居宣長(72)  
などが死に、清国では「大清会典」を統修し、英國がアイルランドを併合し、米國ではジエフ  
・ソーンが大統領に就任した年。一八三四秋田・大阪などで米騒動があり、頼杏坪(79)  
が死に、頼山陽(53)の死後二年、清国は英船の阿片輸入を重ねて禁止した年である。

▲ 采叢 6 ▼ 岑仲勉 李孝遂流儋州卒 通鑑隋唐紀比事類編（一九六四年中華書局刊）  
通鑑二〇四垂拱三年：「武承嗣又使人誣李孝遂。……太后以孝遂有功，十一月，戊寅，減死除名，流儋州而卒。」考異一一云：「新紀『天授元年五月己亥，殺梁郡公李孝遂。孝遂初封梁郡公，以平除厥業功，改封吳國公，垂拱三年減死除名，配流儋州，當削爵矣』。新傳云『流儋州薨』，紀傳自相違。唐國云：『四月十一日，謀益州長史李孝遂，亦舊任也。』」統紀：「誅孝遂并其黨崔元防、張安廟。」唐國：「并其黨知闐、董元防、張安廟等。」今從實錄及舊傳。」按泊王康四爲李卿讓本官表，經余考證李卿爲李珍，亦卽同第九諱刑書「去月十五日，陛下特憲詔囚李珍等無罪」其人也。表當永昌元年八九月間所上，中有云「橫拔逆賊除敬慎以私警采福，誣臣云與叔李遂（「遂」爲「孝」之訛）交通逆豎，……況臣叔孝遂推使未迴，在於愚臣，更須待罪」，是孝遂當年曾被敵軍一度誣扯，派使推助，結果如何，未得明證，猶留疑書也。

▲ 采叢 7 ▼ 唐杜甫 公安送李二十九弟晉肅入蜀余下沔鄂 杜工部集影宋本 卷十七  
 正解柴桑繩仍看蜀道行橘烏相背發塞橫一行鳴南紀連銅柱西江接錦城憑將百錢卜鶴泊問吾平（1837）  
 ▲ 采叢 8 ▼ 宋王應麟 評詩 翁注因學紀聞（國學基本叢書）卷十八

公安送李晉肅入蜀 盡卽李晉之父（問（古漢括）「李晉傳」系出鄭王後鄭王名亮太祖第八子非高祖之子名元範者元範則稱小鄭王或曰惠鄭王矣〔公（元）坼案〕李晉以父名晉肅不得舉進士韓文公爲作贊辨

有周氏歷數既歸誕華商政皇皇后帝元老於新邦惟邵康公欽若昊天弼成周道疑而無象用而無方輝動於幽陰明光於上下總三才之懿德弔萬姓之毒痛在昔鳳鳥鳴山麟蟲躍舟大人經綸賢哲爲之誦命是故朝文王於鄆邑翊武王於孟津與公旦夾輔成王紹綏祖業二后陟配而修太平當其嗣君幼立靈廟稱亂冢宰遺流言之謗太保形不悅之辭貳鵠鵠而未歸感狼跋而旋悟稽神謀而不私蔡叔聽天命而不惑姬公嗚呼蓋殺之道方盛烈文之孫迪哲貽疊慶以享亂微徽顯於後土誰爲不臣我實有主故書曰二公寅亮分正邦國王在鑄所以殷茲陝西自桃林抵流沙盡神州之石地六服羣辟會於京師華戎稱首咸聚其訓不玩遠物而賓鬼方允王保之肆於時夏萬邦倚相九命作伯載以龍旂執以桓圭決決景風自北而南皇化有本生人定性實以一德革其二心由是播爲國經聚作冢道施於夫妻夫妻不敢不順行於父子父子不敢不親睦於諸侯述職柔於百姓百姓康乂時無害氣律無競風蒙以慶雲潤以膏雨然後相洛邑考濬廟翹有客以助祭闢先王之大孝故得周公受其龜食仲尼稱其麟趾既沒淳源下襄湯也不能止鳴條之師武也不能無甲子之陳生二代之末而恥夏殷之事出五兵之後而懷揖讓之風則尚父同衡宣有懿色啓金縢以定變辟嘉禾於東征惟周公執德不回平其叛國惟召伯誠明其道克正孝孫邦之延長必有其自向非布以懼悌臻乎中庸則不能期逾七百祚邁三十元命無紀上天無功權而代之我制其數王乃班寶玉以授瑞冊子孫而就封爲燕太伯奄有遼碣元牡秬鬯與周始終聖唐續禹舊服丕應天統皇帝睿文懿武光宅海隅思二南而永懷故壤禮十亂而修及廢祀貞竇姬姓卜其族以爲戶典有秩宗設其官以爲主陝縣令李晉肅虔奉新政恭惟昔賢誦刻石書以慰餘俗徵士

家於太史採夷命於古文教雖不敢作頌曰

相維宗周王業既成天命文王召公乃生遂佐文王潛翊夷明事紂得禮伐崇有名譽不得縱禍不得嗣西土率順東鄰記傾武王翦商克集丕祚惟公秉文亦贊其武乃牧牛馬乃養干槍戎功告成靈化下士三監淮夷不率不循叔旦徂征王家遺屯幼主臺惑王疑不信王謂太保誦予沖人遂歸周公反風乃振王謂二公董正折封疆理天下至於海邦自陝而西自陝而東乃左乃右一其靈功惟德牧人在周其召武亂皆坐君臣同道惟棠有陰惟梅有標悠悠蒼生各慕其教陝野蕪蕪蒸郊浩浩二千餘載管磬在廟草霧德風山呼頌聲我思豪公勒石祠庭

\*この文については拙稿「唐詩」でやや解説したが、他にも論すべき問題がいろいろある。たとえば、元命無紀上天無功、など。後日あらためて考えたい。

八雜記・36▼書 評

書評に関する學問は中國で早くからひらけ、著作も極めて豊富だ。けれども、李賀書評といつたものがあるかというと、それはない。王琦注の前巻にのせる「評註諸家姓氏源里考」や鈴木虎雄註の解説がまずそれにあたるが、ごく簡単なものである。たれかが早く作ってくれないかと待ち暮しているところが李賀にとりつかれる人というのは、李賀の詩そのものにとりつかれてしまふ人が多いうらしく、そのことによ詠を読むありかたとしては最も望ましく、そんな読者をもつづけたことは李賀の讀人としての名譽であろう。しかし、書評のまとまつたものがないことは

李賀詩を読む者にとって不便なことには間違ひのない事実だ。李賀詩の読者は、それぞれの胸に、あるいはノートに、それぞれの李賀書誌をたくわえているはずだ。それを公開しておけば、やがてたれかが集大成の勞をとつてくれるださう。こういう仕事は國公立の図書館や研究所が人と費用を動員すれば、わりあり簡単にできることだと思うが、そういう機關はまたそれぞれに忙いらしく、李賀のためにその勞と金とを費すところへつけかねいやうし。やむなくわたしの知識の貧弱をさらけ出すことから始めなければならぬことになる。

### 杜牧の「李賀集序」に。

賀まさに死せんとし、嘗て我に平生著す所の歌詩を授く。わかちて四編となし、凡そ千首。といふのが、賀の集についての最も古い記録である。「わかちて」の原文は「雜」とする本、「離」とする本がある。「千首」を「二百二十三首」「二百三十三首」「若干首」とする本があり「千首」は若干首の若がなくなり千が千とあやまられたものであることなどについて口・拙稿「杜序」にのべた。

これからあとは見るに従つて雑然と陳列する。

「新唐書」藝文志には「李賀集五卷」としるす。

宋の歐陽修等撰「崇文總目」は現存官<sup>藏</sup>古の一冊といわれるが李賀の集を著錄しないようだ。

宋 陳振孫「直齋書錄解題」（影武英殿聚珍版）卷十九

李長吉集一卷（舊唐書藝文志作五卷文獻通考亦云集四卷外集一卷）

唐奉禮郎李賀長吉撰賀不壽仕不顯而多富節其人此不復叙

陳振孫は字は伯玉、号画齋、安吉の人。嘉定四年一二〇二年漂水教授、淳祐九年一二〇九正月侍郎致仕、家居して吳興志を修し、まもなく歿した、という。「世、多くその人を書うを喜一ぶ。一二には復た叙べず」は見識のあることばである。「一二」とはから、世人が李賀の人について語るほどその作品を読まなかつたであろう当時の風潮がうかがわれる。この内の接語は聚珍本が編まれたときつけられたものであろう。

『宋史』に藝文志には、「李賀集一卷又外集一卷」と記す。鈴木注が「宋史藝文志亦曰く李賀集五卷」と、「どうのに何かの間違いだろう。」

元馬端臨『文獻通考』卷二百四十八・

### 李長吉集四卷

董氏曰唐李賀長吉鄭王之孫七章能詞章韓愈皇甫湜聞之過其家使賦詩援筆輒就自目曰高軒過二人大驚年二十七終協律郎賀詞尚奇詭爲詩未始先立題所得皆豪邁遠去羣匯睡徑當時無能效者舉荷十數篠雲韶工合之絃管云或說賀卒後不相悅者盡取其所著投園中以故世傳者不多外集予得之梁子美家姚鉉頤選藝文集中

宋景文諸公在館嘗評唐人詩云太白仙才長吉鬼才然長吉有雁門太守詩曰黑雲壓城城欲摧甲光向日金鱗開王安石曰是兒言不相副也方黑雲如此安得向日之甲光也

朱子語類曰李賀詩巧然較怪不如太白自在

後村劉氏曰樂府惟李賀最工張籍王建輩皆出其下然全集不過一小冊世傳賀中表有如賀才名投其集溷中故傳於世者極少余竊憲不然天地間尤物且不多得況佳句乎使賀集不遭厄必不能一一如今所傳本之精善疑賀手自銓揮者耳

鈴木注が「而して文献通考に曰く、李長吉集四卷外集一巻と。」と「のものも合わない。墨氏の讀書記に、「外集はわれこれを梁子美の家に傳たり」というのは、當時、外集のみ單行するものが、あつたのであろうか。劉後村の李賀集の流布するものが賀の手定のものにもとづくものだらう」という推測は、当つていると、わたしはおもう。鈴木注はまた、「黃長睿（伯思）の昌谷別集後跋によれば、李賀詩凡五十二首とある」という。いまわれわれの見る外集は二十二首を收める。鈴木注の引用の仕方がまちがつていないうなら、全く別の形の外集があつたことになる。

この項はだいぶ長くなりそうだ。別に顛を立てた方がよかつたような氣もするが、別に急ぐこともないので、本号ではこれだけにしておく。

▲雜記・37▼ 真男子

暮末の勤王僧といわれる秋月性の『清狂遺稿』を読んでいたら巻上に「松童子詩卷の後に顛す」

數首新詩錦繡篇 教首の新詩 錦繡の篇

筆華兼見墨痕鮮 筆華兼せて見る 墨痕の鮮かなるを

丹忠報國眞男子 丹忠報國 真の男子

白眼望天美少年 白眼 天を望む 美少年

成業可期何更猶

成業 期すべし 何更猶い遠なら

酒心有得即忘風

酒心 得るあらば 即ち限りを忘む

古物遺失豈無憾

古書万巻 諸<sup>ハシ</sup>す看破せん

春初欣君立志誠

春和して君を放ぶ 仁哉の望みを

「」の詩にふと李謐の「唐兒の歌」(1022(20666) 感じた。第三回に謐の「杜鵑出世圖歌子」から

どつたのかと思われるほどだ。

しかし月性の詩は李謐とはまた全く異様のもので、また、ほかには詩を起わせやうなものもない。月性は周防遠崎の、本願寺末の妙田寺の住職で、広瀬想莊らと交渉のあつた詩僧だから、謐の集を読んでいて不思議なく、集をよさなくとも「唐兒歌」は聞き知っていたかもしだれ。わたしが噂に聞いた月性の人となり、よりは、詩の方がよく、詩から察すると噂ほど義剛な人でないような気がする。右に引いたものは集中ではあまりいい方の部類にはいられだらう。

文政紀元に『官校李長吉歌詩』が上板されたのは、時代がこの兎オをうけとめるに足るだけの感性を洗練していたところだとどうか。

八雜記 37 ▼ 一一〇世纪の李謐(二) 魯西・付記

高田淳「魯西詩譜」の本體でみて算ってきた。こゝし四重に中央公論社から出たもの。作詩の動機や、詩の解釈に、後づんだ分析があり、教えて貰うといいことが多い。

「沈淵の哀しむ」篇についての解説の中で、あの「沈淵」は大嘗で徐錦継身博の斎政

府攻撃の打電を主張したのが魯迅自身としたのはフィクションで、魯迅は実は范と同じ立場にあつた、ということを、周作人の「魯迅小説中の人物」によつて、説く。

また、詩の第一首の「鷄虫」は、范を防れた教育科長何幾仲をさし、「何幾仲」と「鷄虫」とは音が通する√といふ。

そのところを読んで、なるほどなるほどと感心した。だがまたしばらくすると、そうには違いないだろうが、それをも含んでもう少しいろがりがあるのでないかと感じはじめた。

唐作人によると、打電を主張したのは梁啓超の政聞会に屬して、蒋觀雲で「豚だつて殺されるときは声を出すのだから」少くとも抗議の声をあげて打電するべきだといい、魯迅はこれに反論して「豚はただ悲鳴をあげるだけだし、人は豚ではないのだから、別の方針をとるべきだ」といつた、といふ。

これを信じてよい事實としても、その魯迅のことばは、范愛農の「殺す奴は殺してしまつたんだし、死め奴は死んでしまつたんだ」というめきの前では、傍観者のおついさいにすぎなくなつてしまふ。言葉の内容がいくら範の側に近よても、あるいはこじろ近づけば近づくほど、蒋觀雲の発言よりもよりいつそう浮わついたものになりかわない。そのことを誰よりも鋭く深く感知したのは、范の言葉を聞いた瞬間の魯迅自身であり、その時、魯迅は母親の胎内を照らし出されたほどの屈辱と自卑とを覚えたのでけなか。

魯迅の文章を読むたびに、それが画刃の刀で、敵を斬ると同時に彼自身が深く傷ついているよ

うに感ぜられてならない。

「鷄虫」もまた、たしかに何幾仲を指したであらうが、「鷄虫」と「幾仲」の言の通する二とに気づいたとたんに、自身が「幾仲」となつていつまに「范愛農」を追放するかもしれぬといふおそれが、追悼会の日の自身の言葉と范の白眼とをともなつて、魯迅をおそつたのではないか。高田氏はこの語の典據として杜甫「緇羅行」の「鷄虫の得失了る時なし、目を寒江に注きて山閣に倚る」を指摘して、一つ説明する。へ雖を縛つて市場に売りにく下男を止めて、杜甫は羅の命を助ける。しかし、この邊のために虫が食われるには、止めることができない。杜甫はそこで、人生得失の窮まりないことを嘆じてゐるのだが、……それならば「鷄虫」のうちに魯迅が自身をも含めたこと、ほとんど禁いない。

そうして、この詩三章を原作者に与えるとき、そえた文章は「表現の奇絶妙想ぶりについての自薦のことば」ではなく、自己嫌惡の裏返しだったのではない。偶然がひきずり出した、この語があまりにも正確にかれの「旧態」に符合したために、どうにも黙つてはいることができず、といって、それは誰にむかっても正面切つて言うことはできない問題であるから、自薦めかして書いたのではない。「辟空一聲、大狼狽」したのは魯迅であつて、何幾仲ら群小は権力・暴力・金等に対しても狼狽しても、詩や文などは屁とも思わぬことを、魯迅はすでに知つていたはずである。(魯迅がみずからを加害者と感じたときの、裏返しでない反応を、「楊君愛農事件についての弁正」と李過安の文章にそえた「語縁」編纂者あての手紙で察することができるだらう)

魯迅が「范愛農」を書いたのは「范君を哀しむ」を作ったのち十四年の一九二六年だった。そこでなぜかれは追悼会でのことを虚構したのか。恐らくかれは「こですべてを告白するつもりで書きはじめたが、その事を描こうとしてもついに描けず、虚構によってその文を辛うじて成立せしめたのではないか。そして、そのことは、文章表現の世界で解決できることではなく、すべきでなく、その生活行動によつてしか生き、范愛農に語らすべのないことを、自覚したのではないか。わたしには、そんな風に感ぜられる。

李賀は、若いときから魯迅が好んだ詩人である。李白の「天オ」、白居易の「人オ」と並んで、「鬼オ」を以て称せられ、二十七歳にして早世した李長吉。「私は散文的な人間ですかう支那のどんな詩人の詩もすきませんでした。只若かった時には唐の李賀の詩を割合に書いて居ました、が、それは難かしくてとても解らない詩で、解らないから感心したのです。今はもうその李君をも感心しません」（山本初枝あて書簡、一九三五・一・一七）。ニヨーベージこの魯迅のことばも、幾分は眞実であろうが、幾分は虚構だと思われる。魯迅の驕書日記にはかなりの部数の詩集が記録され「石屏集」十巻を写したりもしている。どんな詩人の詩もすかめ人のわざうしくない。李賀の詩が難かしいのは定評だが、そして難しいことは事実だが、しかし李賀を「ことづら難しい」と言いふらしてきたのは、魯迅を異端と言いふうすような式の正人君子の立場にしがみついている人たちだった。「解らないから感心した」とは、正人君子たちには解らなものだから私は感心した、といつことに違ひない。ところが新文学運動の中で伝統文学の読み直

しがはじまり、袁中郎はやりについて李長吉はやりがやつて來た。熊裕芳「李長吉与月」一九三〇・周間風「詩人李長吉之詩」<sup>同</sup>蘇雪林「李長吉的詩」<sup>同</sup>萬曇「詩人李長吉」<sup>同</sup>王禮錫「驕貴詩人李長吉」<sup>同</sup>王禮錫「李長吉評伝」<sup>同</sup>などがその產物であり、日本でも斎藤瞬「李長吉の參歎主義的傾向」<sup>同</sup>、日夏秋之介「李長吉新意」<sup>同</sup>などが出ていた。それらの中には西洋の物指をあてて李賀を切り刻みわかつた様な頗をしているものがかなりあつたようである。魯迅は、「中國のゴーリー」とよばれることを拒否し、わたしが中國の魯迅だ、といつた。

へ人は古いが事に近いのは、袁中郎である。一〇明末の作家たちは、文學史上、自ら、その価値と地位を有する人々である。だが不幸にして一群の学者たちにかつぎ出され、當め上げられ……「見よ、これは何と『性靈』ではないか！」といつたが、中郎の本質とは、むろん何の關係もないものだ。／魯迅「罵り殺すこととかつぎ殺すこと」<sup>松枝著</sup>

李賀を中國のショリーといつたり、ロンブローザマックス・ノルダウぱりに李賀を氣虚いあつかいする時代。魯迅が「今はもう」という「今」とはそのような時代をさし「その李君をも感心しません」とは、李賀その人ではなく、李賀狂を自称する人たち、あるいはかれらにかつぎ殺されそうな「李賀」をさして「李君」といつたのではないか。

高田氏のかかげる魯迅の最後の詩は「亥年残秋の偶作」で、その第八句すなわち最後の句は、「起坐星斗正闌干」（起ちて星斗を看れば 正に闌干たり 高田氏訓）その年は一九三五年だ。李賀の「河南府試十二月舉辭 七月」の第九・十句は「曉風何払 北斗光闌干」である。（十一月十三日）

## 正 試

第五号	四二頁	13行	荒井建氏	荒井建氏と訂正
第六号	一八頁	11行	長亦爾爲	長生亦爾爲と訂正
四五頁	14行	雜記	37 雜記	38 と訂正
見贈				

小高根二郎「東樹園」188・189・草森紳一氏「現代詩手帖」718-11・原田幽雄氏「衆生」昭46.10

## 後 記

第五号を発行してのち、わたしは頗る多事であった。第六号を十一月中に発行することができなかつたが、どうにか果せた。第七号を一月中に発行することに、あるいは困難かもしだぬ。その場合には読者各位のおやるしをお願いしたい。ある出版社から李賀についての論考を書くようにと要請があつたがあことわりした。もう少し李賀の全体がほつきりしてから、というのがその一つの理由である。他のいくつかの理由は、わたしの内部ではつきりしているほど明瞭に出版社の人に理解してもらえるように説明できるかどうか自信がなかつたので言わなかつた。幸い説明するまでもなく事けすんだ。

一とし辛亥歳は、まことに、辛亥の歳であった。小さなわたしの周辺にまで、一路平安。